

社会的市場経済の原像

— ドイツ経済政策の思想的源流 —

福 田 敏 浩

I はじめに

ドイツは社会的市場経済の国である。社会的市場経済はドイツ語で“Soziale Marktwirtschaft” というのであるが、この語はもともとドイツの新自由主義者ミュラーアルマック (A. Müller-Armack) によって1946年にはじめて使用されたものである。¹⁾ ミュラーアルマックは第2次大戦後の西ドイツにおける経済政策の従うべき指導像 (Leitbild) の意味を込めてこのコンセプトを提唱したのであるが、その後この語は (西) ドイツ政府の実際の経済政策を、さらには (西) ドイツ経済そのものをさすようにもなった。³⁾

西ドイツで社会的市場経済の経済政策が開始されたのは1948年6月20日の通貨改革からである。新自由主義者エアハルト (L. Erhard) がその陣頭指揮にあたった。エアハルトは通貨改革を皮切りに物価・賃金統制の廃止や物資割り当て制の廃止など一連の経済自由化を矢継ぎ早に断行してそれまでの統制経済を短期間のうちにスクラップし、ただちに社会的市場経済の建設に乗り出した。「革命的変化」⁴⁾ (revolutionärer Wandel) と呼ぶにふさわしい劇的な体制転換であった。

それからちょうど半世紀が経った。その間保守のキリスト教民主同盟 (CDU) と革新の社会民主党 (SPD) が交互に政権を担当してきたが、両政権とも社会的市場経済の旗印を降ろすことはなかった。社会的市場経済を標榜した経済政策

1) ミュラーアルマック自ら「1946年に命名した」と述べている。Müller-Armack [21] p. 257

2) Clapham [3] S. 74, Vanberg [32] p. 17, Watrin [33] p. 405

3) Cassel [2] S. 5, Hentschel [11] S. 25, Kloten [14] S. 7, Soltwedel [29] S. 11, 43

4) Möller [18] S. 366

が一貫して展開されてきたことになるが、今日に至るまでそれは三つの局面(Phase)を通過し、今は第4の局面にある。通貨改革から1950年代末までの経済復興・高度成長の第1局面、1960年代から1982年までの社会保障に軸足を置いた第2局面、1983年から1980年代末までの小さな政府をめざした第3局面、そして1990年10月のドイツ統一後の第4局面である。

社会的市場経済の歴史の中で最大の事件は何といってもドイツ統一であろう。議会制民主主義と社会的市場経済の国ドイツ連邦共和国と、一党独裁と管理社会主義の国ドイツ民主共和国がそれこそ一夜にして統一を実現したからである。統一作業はドイツ連邦共和国主導で行われ、その基本法(Grundgesetz)が統一ドイツの基本法(つまり憲法)として採用された。ドイツ連邦共和国が統一ドイツの国名となり、1990年10月3日にドイツ民主共和国は世界地図から消えた。

ドイツ統一の作業は経済面からスタートした。経済体制の面で東西ドイツを統一しようとする努力が続けられた結果、1990年5月18日に両ドイツ政府間で「通貨・経済・社会同盟創設条約」(Vertrag über die Schaffung einer Währungs-, Wirtschafts- und Sozialunion)が締結された。同条約は同年7月1日に発効し、両ドイツの経済統合が急ピッチで進行した。

両ドイツ政府はどのような形での経済統合に合意したのであろうか。結論を言うと、東ドイツに西ドイツの社会的市場経済を移植することによって両国経済の統一を図るというものであった。すなわち「通貨・経済・社会同盟創設条約」の前文で「ドイツ民主共和国に……いっそうの経済的および社会的発展の基礎として社会的市場経済を導入する」⁵⁾ことが謳われたのである。このことは取りも直さず、東ドイツに40年にわたって存続したソ連型管理社会主義をスクラップするということを意味した。

「通貨・経済・社会同盟創設条約」の第1条は、通貨同盟、経済同盟および社会同盟の原則を定めている。⁶⁾すなわち第1条の第2項で両ドイツに共通の通貨として西ドイツのドイツマルクを採用すること、および西ドイツの連邦銀行

5) Stern[31]S.79

6) Stern[31]S.79-80

が通貨・発券業務を担当すること、第3項で両ドイツに共通の経済体制は社会的市場経済であること、第4項で両ドイツに適用されるのは社会的市場経済に応じた労働法、貢献原則と社会的バランスの原則に応じた社会保障制度であること、が規定された。

社会的市場経済の文言が「通貨・経済・社会同盟創設条約」に明記されたことの意義は大きい。国家条約の形で社会的市場経済が公式に認知されたからである。西ドイツ時代の基本法には社会的市場経済の文言や規定がなかっただけになおさらである。社会的市場経済はドイツ統一を機にようやく法的に市民権を得たのである。

「通貨・経済・社会同盟創設条約」の発効によって、国家統一に先立ち、東ドイツ経済の西ドイツ化が開始された。つまり東ドイツの管理社会主義のスクラップが本格化した。この意味で「エアハルトはマルクスに勝った。『マルクス・エンゲルス全集』はエアハルトの書いた『万人の福祉』にとって代わられた⁷⁾」といえよう。

社会的市場経済は統一後のドイツにおける公式の経済体制になっただけではない。1990年代に入ると相次いで資本主義への移行を開始したポスト社会主義諸国における体制転換の指針ともなった。中でも中欧諸国は社会的市場経済のやり方を、全面的にはではないにしても、導入しようとしてきた。

ドイツの社会的市場経済は、しかし、今や深刻な状況にある。低効率シンドロームに悩まされていた東ドイツをいきなり抱え込んでしまった結果である。労働生産性および一人あたり平均実質賃金が西ドイツの1/3、国民総生産額が西ドイツのおよそ1/10の経済力しかなかった東ドイツを吸収し、その体制転換を急進的に行ったのである。このため国家財政支出が急増し、国民の租税負担も増加した。民間経済の活力の減退、国際競争力の低下、低成長、失業の増加も顕著になった。

このような難局を打開するにはどうすればよいか。ドイツの経済学界に突きつけられた重い課題であるが、最近目につくのは社会的市場経済の再生を説く

7) Haselbach[9]S.9

新自由主義サイドの主張である。社会的市場経済の本来の理念・体制像・政策構想に立ち返ってドイツ経済のシステム改造を行うべきであるという意見である。グローバリゼーションやEUの通貨・経済統合などのドイツ経済を取り巻く環境変化の中で社会的市場経済の再生は可能か、その戦略は有効か。これが筆者の考えてみたいテーマである。とはいえこのテーマに筆者なりの答えを出すには時間がかかりそうである。社会的市場経済の理論と現実を多面的に考察した上でないと答えを出せないと思うからである。数年のパスベクティブをもって考えてみたい。

その手初めに本稿では社会的市場経済の名づけ親であるミュラーアルマックの説を取り上げてみよう。ミュラーアルマックは社会的市場経済に戦後ドイツの復興を託した。かれにとって社会的市場経済は理想像であり、ドイツ経済改造のガイドラインとなるべきものであった。

II ミュラーアルマックの経歴

アルフレート・ミュラーアルマック (Alfred Müller-Armack, 1901-1978) はわが国の経済学界ではほとんど無名に近い存在である。現代のドイツ経済に関心をもつごく一部の研究者に知られている程度であろう。紹介をかねてかれの経歴と学問業績を簡単にスケッチしておこう。⁹⁾

ミュラーアルマックは1901年にドイツのエッセンで生まれ、プロテスタント信仰の厚い中産階級の家で幼少年期を送った。長じてギーゼン、フライブルク、ミュンスターおよびケルンの各大学で経済学を学び、1934年にケルン大学の員外助教授、1939年にミュンスター大学の助教授、1940年に同大学の正教授に就任した。この間の主要な学問業績には『資本主義の発展法則』（1932年）、『新帝国における国家理念と経済秩序』（1933年）、『経済様式の系譜学』

8) 筆者は別の機会にドイツ新自由主義と社会的市場経済の関係を論じたことがある。福田[5]を参照されたい。

9) ここではHaselbach[9]S.46-61,117-153に多くを負っている。なお、ミュラーアルマック説および社会的市場経済に関する邦語の文献は限られてはいるが、力作や秀作に恵まれている。比較的最近のものには鉢野[8]、石田[13]、丸谷[17]、長屋[23]、野尻[24]がある。

(1940年)がある。『資本主義の発展法則』はシュラー(M. Scheller)の哲学的人間学をベースにしてゾンバルト(W. Sombart)およびウェーバー(M. Weber)の資本主義研究を発展させたものである。またこの書物では、資本主義のもとで暴走してきた市場経済を強い国民国家によってコントロールすることが主張され、イタリアのファシズムがそうした国民国家の範型として擁護されている。『新帝国における国家理念と経済秩序』は哲学的人間学の立場からファシズムを正当化しようとしたものである。『経済様式の系譜学』は宗教社会学の角度から資本主義の歴史的個性を浮き彫りにしようとしたものである。社会・経済・国家の変化および発展は宗教的世界観の関数であるという宗教決定論の見地から資本主義とプロテスタンティズムの関係が問われた。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の延長線上にある説といえる。

ミュラーアルマックはナチズムの時代に一時期政府の東方植民行政に携わったこともあるが、徐々にナチズムから距離をおき、やがてファシズムを捨て自由主義の方へ転向するようになった。このような思想的転向についてミュラーアルマックは多くを語っていないが、フライブルク大学を拠点にして反ナチズム活動を展開していたオイケン(W. Eucken)のグループとの出会いがひとつの転機になったのではないと思われる。ミュラーアルマック自身の言葉を引けばこうである。「戦時中に私はワルター・オイケンのグループから競争原則の再生をめざす考え¹⁰⁾を受容した」。

第2次大戦後のミュラーアルマックは新自由主義者として学界に再デビューする。1947年に『経済統制と市場経済』を世に問い、社会的市場経済のヴィジョンを提示した。1948年と1949年には『神なき世紀』と『現代の診断』が出版された。いずれもプロテスタント信仰の筆致で書かれた近代批判の書である。これらの中でミュラーアルマックは、近代ヨーロッパは世俗化(つまり宗教解体)の時代であり、そうした時代の申し子としてナチズムが登場し、精神世界は荒廃した、という診断を下した。そしてナチズムが崩壊した1945年以後の時代にヨーロッパ社会の安定とキリスト教的精神生活の復活の願いを託した。このような

10) Müller-Armack [20] S. 10

願いと社会的市場経済は無縁ではない。つまり、社会的市場経済はいわば精神生活活性化のための手段として考え出されたのである。

社会的市場経済の旗手になってからのミュラーアルマックは、しばらくケルン大学に籍はおきはしたものの、実践者の道を歩み始めた。1947年に西ドイツの経済改革を指揮したエアハルトの顧問になり、1952年には経済相になったエアハルトの要請で連邦経済省に入り局長を経たあと1958年にヨーロッパ統合担当の次官に就任した。その間エアハルトともども社会的市場経済の経済政策を推進し、西ドイツの経済復興とヨーロッパ統合に尽力した。官を辞したのは1963年である。ミュラーアルマックによればこの年「フランスがイギリスの(EEC)加盟について拒否権を行使した時に職を退いた」¹¹⁾。退官後の1963年11月にケルン大学にもどり後進の育成にあたった。ミュラーアルマックのグループはケルン学派(Kölner Schule)と呼ばれ¹²⁾、ドイツ新自由主義の一翼を担った。

ミュラーアルマックの社会的市場経済論はこのような実践の中から生み出されたものである。いわば知と行の反復運動の産物であった。といっても、ミュラーアルマックに思索を集大成した体系書があるわけではない。時論または政論の形をとった論文が数多く存在するだけであるが、さいわいなことにそれらを取捨選択して編んだ書物が1966年に出版された。『経済秩序と経済政策』(*Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*)である。この書では1948年から1965年の間に書かれた論説が16編ほど時系列的に配列されており、ミュラーアルマックの思想形成過程が理解できるようになっている(1947年の『経済統制と市場経済』も収録されている)。以下ではこの書を中心にしてミュラーアルマックの社会的市場経済論を見ていくことにしたい。

Ⅲ 社会的市場経済の秩序像

社会的市場経済はもともと第2次大戦で壊滅的打撃を受けたドイツ経済の復興のために提出されたコンセプトであった。つまり、ミュラーアルマックはは

11) Müller-Armack[20]S.459. ()内は筆者の挿入。

12) Hayek, et al. [10]S. XXXV

じめから政策実践を意識してこのコンセプトを構想したのである。その内容を一言でいえば秩序構想(Ordnungskonzeption)ということになる。秩序構想といっても簡単に捉えられるような平板なものではなく、かなり複雑な、いわば立体的な体裁をとった構想である。その世界を筆者なりに解釈し整理して描き出してみよう。

1. 当為としての秩序

社会的市場経済は当為としての秩序である。めざすべき理想としての秩序である。ミュラーアルマックは次のように述べている。「社会的市場経済とは何か。それはまず、これまでの歴史現実において実現されたことのない市場経済秩序の可能性である」¹³⁾。

社会的市場経済はめざすべき市場経済であるが、それはレッセ・フェールの自由市場経済ではない。「社会的に形成された市場経済」¹⁴⁾(sozial gestaltete Marktwirtschaft)、「意識的にコントロールされた、しかも社会的にコントロールされた市場経済」¹⁵⁾(bewusst gesteuerte, und zwar sozial gesteuerte Marktwirtschaft)である。市場経済の前に社会的という形容詞が冠せられたゆえんである。

2. 既存経済秩序批判

「社会的に形成され、社会的にコントロールされた」とは何を意味するのだろうか。それを理解するには、回り道ではあるが、歴史に登場した経済秩序に対するミュラーアルマックの批判を見ておかねばならない。ひとつは19世紀の自由市場経済、もうひとつはナチズムの統制経済に対する批判である。

近代市民革命の中から生まれた自由市場経済は国家から個人を解放し、経済生活における個人の自由を実現した。自由の実現という限りでは自由市場経済の果たした役割は計り知れないほど大きい。ところがその反面で深刻な社会問題を発生させた。景気変動に伴う失業・貧困・貧富格差などである。加えて自由市場経済は世俗化(Säkularisierung)を加速し、19世紀は神なき世紀になっ

13) Müller-Armack [20] S. 234

14) Müller-Armack [20] S. 145

15) Müller-Armack [20] S. 109

た。経済支配・物質優位の時代となり、精神生活は貧困化した。マルクス(K. Marx)流に言えば人間疎外の深刻化である。ミュラーアルマックはこのような自己喪失・他者依存の精神状況をドイツの新自由主義者レプケ(W. Röpke)に倣って「プロレタリア化」(Proletarisierung)¹⁶⁾と呼んだ。

物心両面での社会問題を招来したのは何か。ミュラーアルマックはその究極の原因を経済の自立化に求めた。自由市場経済の制度化によって社会・国家・宗教の中に包み込まれていた経済が解放され、一人歩きを始めた結果だと考えた。

社会問題の深刻化に対して国家は手をこまぬいていたわけではない。19世紀も半ばを過ぎると西欧諸国の政府は再び経済へ介入し始めた。政策の中心をなしたのは労働条件の改善・各種社会保険の制定・生活保護などの労働者救済政策と景気政策であった。この当時の干渉は通常、干渉主義(Interventionismus)と呼ばれるが、それは事後的・局所的な性質をもっていた。問題が発生したあとに問題が生じたところに限定して施策を講じるやり方である。

ミュラーアルマックは、干渉主義は統一かつ体系的な政策構想を欠いていただけにかえて事態を深刻にした、と見た。中でも場当たりの国家干渉は自由市場経済のもっていた個人の自由の保証と政治的紛争の中性化¹⁷⁾という利点を否定する方向に動いてきた。「自由市場経済の失敗の原因はそれ自体のうちにあるのではなく、前世紀以来の干渉主義によって被ったその歪みのうちにある」¹⁸⁾。

ドイツのナチズムはこのような流れの中で登場した。国民社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)政府がめざした経済運営の方向は経済統制(Wirtschaftslenkung)であった。経済を国家へ従属させることによって社会問題の解決を図ろうとしたのである。ミュラーアルマックはこの経済統制を経済への集権的国家干渉と捉え、厳しく批判した。NSDAP政府が場当たりの行った価格凍結および賃金凍結の政策は市場経済の機能麻痺を招き、ついには国家による資源の全面割

16) Röpke[26]S. 29-30

17) Müller-Armack[20]S. 25

18) Müller-Armack[20]S. 22

り当てを余儀なくした。経済統制は干渉主義の行きついた最終にして究極の形態であった。その結果、経済生活における個人の自由が抑圧され、物心両面で国家への隷従が強いられた、というのがミュラーアルマックの診断であった。

3. ふたつの価値

理想は現実批判の中から生まれる。理想はいつも現実を超えたところにある。社会的市場経済も例外でない。つまり、ミュラーアルマックは現実批判の中から教訓を読みとって社会的市場経済を設計したのである。設計にさいしてミュラーアルマックが基礎においたのはキリスト教の人間観であった。¹⁹⁾人間を人格として捉え、自由(解放と自律と自己責任がセットになった自由)と人格の尊厳を重要視する考えである。このような考えがあればこそミュラーアルマックは、社会的市場経済の哲学的背景は市場メカニズム信仰にすぎないという批判に対して、社会的市場経済は「宗教的ルーツ」²⁰⁾をもち、したがって「神学的・哲学的信念に発するシステム」²¹⁾であることを強調しえたのである。

ミュラーアルマックは自由の価値に合致する経済システムとして市場経済を選択した。個人の自由を最大限に実現する経済システムは市場経済のほかはないというのがその理由であった。逆にいえば市場経済は「人間の自由役に役立つ、…われわれに強制や搾取からの自由の感情を与えてくれる手段・手続き・方法である」²²⁾。

社会的市場経済の土台にあたる価値がもうひとつある。社会的安全(soziale Sicherheit)である。この価値も宗教的信念からきていると思われるが、それ以上にこれはミュラーアルマックの市場経済観に発していると解される。かれは、上に述べた19世紀および20世紀前半の市場経済秩序の検討を踏まえて市場経済(つまり市場価格メカニズム)には社会問題を解決する能力はないと見た。ここから人びとの生活を脅かす失業や貧困や環境破壊などは社会的に解決せざるをえないという命題が出てくる。社会的市場経済の「社会的」にはこのような社

19) Grosser[6]S.11

20) Müller-Armack[21]p.258

21) Müller-Armack[21]p.259

22) Müller-Armack[20]S.192

会的解決という意味が込められている。

社会的安全にはもうひとつ重要な意味が込められている。市場経済を社会的に制御するという意味である。19世紀に社会・国家・宗教の制約から解放された市場経済は行き過ぎた競争によって物心両面でのプロレタリア化を招いた。市場経済はレッセ・フェールの時代に信じられていたような万能の「全自動機械」²³⁾ (Vollautomat) などではなく、「半自動機械」²⁴⁾ (Halbautomat) であることが分かった。その暴走を封じるにはもう一度社会的に囲い込む必要がある、というのがミュラーアルマックの到達した結論であった。

上述の「社会的に形成され、社会的にコントロールされた」の意味は、つまり「社会的」の意味はこれで明らかになった。市場経済そのものを社会的に制御することと、社会問題を社会的に解決するということである。「社会的」は、ヴァンベルク (V. Vanberg) の言うように、一方で「より広い社会制度的秩序への市場経済の包摂」²⁵⁾ にかかわり、他方で「市場プロセスの結果」²⁵⁾ にかかわるということもできる。

自由と安全、これが社会的市場経済を支える二つの主要な価値である。ミュラーアルマックはしばしば「社会的安全と経済的自由の結合」²⁶⁾ とか「自由主義秩序と社会的安全の真の結合」²⁷⁾ とかの言葉を使っているが、これらは価値の面から見た社会的市場経済の定義である。ミュラーアルマックはまた、社会的公正 (soziale Gerechtigkeit) や社会的バランス (sozialer Ausgleich) の価値的タームを使って社会的市場経済を定義している。「自由と社会的公正の真の結合」²⁸⁾、「市場での自由の原則と社会的バランスの原則の結合」²⁹⁾ といった具合であるが、これらは市場プロセスの結果を意識した定義である。市場競争の結果として出てくる所得格差などの問題の解決を念頭においた定義である。

23) Müller-Armack [20] S. 115

24) Müller-Armack [20] S. 235

25) Vanberg [32] p. 22

26) Müller-Armack [20] S. 236

27) Müller-Armack [20] S. 233

28) Müller-Armack [20] S. 242

29) Müller-Armack [20] S. 243

4. 調和的秩序

以上から分かるように、社会的市場経済は社会と経済が交差する世界である。より正確に言えば経済が社会によって囲い込まれている世界である。ミュラーアルマックが社会的市場経済を「社会経済秩序」³⁰⁾(gesellschaftliche und wirtschaftliche Ordnung, social and economic order)と呼ぶゆえである。

社会的市場経済は、しかし、うちに緊張を孕んだ秩序である。社会的安全と自由はいつも両立するとは限らないからである。どのように両者のバランスをとるか。両者を「新しい実践的な調和へもたらす」³¹⁾にはどうしたらよいか。その解決のためにミュラーアルマックが持ち出したコンセプトが二つある。補完性(Subsidiarität)と市場整合性(Marktkonformität)³²⁾である。

補完性はカトリック社会論(Katholische Sozialtheorie)に由来するコンセプトである。国家や社会は個人の自己実現をサポートすべきであるという考えである。つまり、社会生活では個々人の自律・自助が原則であるが、個人の手余りに余る問題については国家や共同体などが手助けすべきであるという教えである。スローガンふうにいえば「可能な限りの自助、必要な限りの公助」ということになろう。

市場整合性はレプケの造語である。³³⁾これは国家の市場経済への干渉の原則を意味する。つまり、国家は市場価格メカニズムを阻害しないように、市場での自由を制限しないように干渉すべきであるという考えである。

のちに見るように、補完性と市場整合性は経済政策および社会政策の原則である。

補完性と市場整合性を採ると自由と安全(社会的公正や社会的バランスを含む)は調和する。少なくとも敵対的対立はなくなる。自由が安全に優先し、自由が安全によって補完されることになるからである。土台の価値の間に深刻な対立はないから社会的市場経済は調和のとれたものとなる——というふう考

30) Müller-Armack [20] S. 295, Müller-Armack [21] p. 256

31) Müller-Armack [21] p. 261

32) この点については Cassel [2] S. 12, Lenel [16] S. 31 にヒントを得た。

33) Pöpkke [26] S. 258ff, 297ff, Röpke [27] S. 78, 350, 393

えられている。ミュラーアルマックはこのような意味を込めて社会的市場経済を「調和的秩序」³⁴⁾ (irenische Ordnung, irenical order)と呼んだ。

5. 開放的秩序

社会的市場経済は閉じたスタティックな秩序ではない。特定の価値を土台にして構成される完結した静的秩序ではない。むしろ「価値を含むが価値を固定しない」³⁵⁾ 開かれたダイナミックな秩序である。つまり、未来に開かれた秩序であり、将来登場する社会的価値を取り込んだり、また将来の社会的要請に応えたりしうる柔軟性を備えたものである。

このようにミュラーアルマックは特定の原理から究極のユートピアを設計しようとする原理主義を退けたのであるが、といて無原則的なプラグマティズムを容認したというわけではない。「社会的市場経済は安易なプラグマティックな処方箋であってはならない」³⁶⁾ のである。

社会的市場経済は「一回限りの実験ではない」³⁷⁾。社会的市場経済は一度限りの政策実践で完成するようなものではない。ミュラーアルマックは、「人々が自由に、かつ社会的に安全に生活できる」³⁸⁾ ような「人間的秩序」³⁹⁾ (humane Ordnung)を実現するには将来にわたって市場経済を社会的に修正したり、改良したり、補強したりすることが必要である、と説いた。そこにあるのは比較級の考えであり、漸進的な発想である。ユートピアをたとえば革命によって一挙に実現しようとする急進主義の考えはミュラーアルマックにはない。

IV 社会的市場経済の政策体系

次に社会的市場経済の政策体系を見ておこう。社会的市場経済は秩序像であると同時に政策体系である。政策体系に関するミュラーアルマックの叙述は——秩序像に関する叙述と同様に——体系的ではない。事項によっては断片的です

34) Müller-Armack [21] p. 261

35) Müller-Armack [21] p. 260

36) Müller-Armack [21] p. 273

37) Müller-Armack [20] S. 261

38) Müller-Armack [20] S. 238

39) Müller-Armack [20] S. 227

らある。政策体系の全貌を明らかにするには検討者の方で多くの箇所に散在している叙述を収集し、それらを論理的に再構成してみる必要がある。以下、筆者なりの整理基準をおいてそうした作業を試みてみることにしよう。

1. 第3の干渉方式

まず国家の経済への干渉方式、つまり経済政策の方式から見ておこう。この点についてミュラーアルマックは「第3の経済政策方式⁴⁰⁾」や「第3の完結した経済政策方式⁴¹⁾」というタームを使っている。第3の経済政策方式は社会的市場経済を特徴づけるものであるが、その含意はレッセ・フェールでもなく、ナチズムの経済統制(Wirtschaftslenkung)でもない新しい干渉方式というところにある。このような主張の背後には過去の干渉方式は失敗したという認識がある。つまり、自由放任は社会問題を多発させたし、経済統制は市場と統制を場当たりに混ぜ合わせたために自由を抑圧した、という診断である。

第3の経済政策方式はレッセフェールと違って国家の経済への干渉を認めるものである。この限りでは経済統制と同様である。ただし、干渉の方式は決定的に異なる。経済統制の場合には統一的な秩序構想なしに、したがって無原則的に干渉が行われたのに対し、第3の経済政策方式の場合には統一的な「全体的秩序イデー⁴²⁾」をベースにし、市場整合性の原則に従って干渉が行われる。全体的秩序イデーとは前述した社会的市場経済の秩序像のことである。

市場整合性は市場価格メカニズムを円滑に作動させるような干渉である。具体的にはどのようなものか。ミュラーアルマックの言うところを解釈すると、いわば市場価格メカニズムのインフラストラクチャーにあたる経済秩序(Wirtschaftsordnung)の形成を目的とした干渉である。具体的には市場参入・退出の自由、市場競争、市場取引の自由などに関するゲームのルール⁴³⁾の制定が考えられている。独占禁止法がその代表例である。ミュラーアルマックはこのようなルールから成る経済秩序を競争秩序(Wettbewerbsordnung)と呼んだ。

40) Müller-Armack [20] S. 109

41) Müller-Armack [20] S. 110

42) Müller-Armack [20] S. 236

43) Müller-Armack [20] S. 197

社会的市場経済における国家の役割は経済政策に尽きるのではない。「社会的」に象徴されるように、国家は経済のほか社会に対しても積極的に干渉する。つまり、国民に自由で安全な生活を保証しうるような社会秩序(Gesellschaftsordnung)の形成をめざした社会政策(Gesellschaftspolitik)も国家の任務となる。その社会政策も経済政策と同様に市場整合性の原則に従う。つまり、国家は市場経済を補完するような形で社会へ干渉しなければならない。

2. 統合者としての社会政策

社会的市場経済の政策体系において中心を占めるのは社会政策(Gesellschaftspolitik)である。社会政策はいわば社会的市場経済の統合者としての役回りを演じていると見てよい。以下、ミュラーアルマックの数多くの論文のあちこちに散在している叙述を筆者なりに繋ぎ合わせてかれの主張する社会政策の個性を浮かび上がらせてみよう。

社会政策の目的は自由と安全を同時に保証しうる社会秩序の形成である。しかるに社会政策の課題は二つに大別される。自由の実現と安全の保証である。

①自由の実現

社会政策の基本任務のひとつは勢力中立的秩序(machtneutrale Ordnung)の形成である。⁴⁴⁾すべての社会勢力を解放するが、同時に社会諸勢力のパワーを相互に中立化し安定化せしめうる秩序の制度化である。そのためにはスタート条件やゲームのルールが定められなければならない。ミュラーアルマックが特に重視するのはスタート条件である。個々人に真のチャンスを平等に与える社会学的スタート条件である。勢力中立的秩序の形成は「自由にもとづく人間的秩序」⁴⁵⁾(eine humane, auf Freiheit beruhende Ordnung)の制度化にとって欠くことのできない前提である。

②安全の保証

社会的安全をめざした社会政策は内容的に二つに区別される。市場経済の社会的制御と社会的バランス(sozialer Ausgleich)の実現である。

44) Müller-Armack [20] S. 227

45) Müller-Armack [20] S. 227

(a) 市場経済の社会的制御

市場経済は放任すると暴走して社会問題を発生させ、挙句に自由を制限したり抑圧したりする傾向がある。市場経済の暴走を抑えるにはそれを「全体の生活様式」⁴⁶⁾ (ganzheitlicher Lebensstil) へ組み込まなければならない。つまり、市場経済を国家、社会、技術、法律の中に囲い込むと同時にこれらの領域の間に内的調和をもたらすことが必要となる。

市場経済はまた、野放しにすると、人間疎外のような精神世界のプロレタリア化を招く傾向がある。プロレタリア化の防止のためにも市場経済を全体の生活様式の中に囲い込む必要がある。

(b) 社会的バランスの実現

市場経済は万能の全自動機械ではない。市場プロセスの所産として所得格差や貧富の差や失業などが生み出される。国民に安全な生活を保証するにはこのような社会的アンバランスを解決しなければならない。

3. 社会政策のカタログ

次に社会政策の具体的内容を見ておこう。といってもミュラーアルマックの叙述の中に体系的なカタログが用意されているわけではない。数多くの論文のあちこちで事例が示されているだけである。しかもその説明は散文的であり、事例の数も論文ごとに違っている。以下のカタログは筆者なりにミュラーアルマックの考えを論理的に敷衍してまとめたものである。A～Cの見出しは社会政策の目的を、a b cは社会政策の手段を示している。

A. 自由の実現

a. 平等なスタート条件の制定

具体例としては財産形成政策が挙げられている⁴⁷⁾。勤労者の財産形成(たとえば土地・住宅取得の促進)によって有産者とのスタート時点での差を緩和しようとする政策である。

b. 自立の促進

46) Müller-Armack[20]S. 227

47) Müller-Armack[20]S. 306

具体例として中間層(自営, 中小企業者など)の自立支援政策が挙げられて⁴⁸⁾いる。

B. 経済の社会的制御

a. 市場経済の生活様式への囲い込み

これに直接かかわる具体例は挙げられていないが, 関係すると思われるのは環境政策(Umweltpolitik)である。これは個人を取り巻く環境全体の改善を内容とするものであり, 具体的には人的資本の育成(教育政策), 防災, 保健衛生の改善, 社会環境の整備, 都市政策, エネルギー政策が⁴⁹⁾考えられている。

b. 脱プロレタリア化(Entproletarisierung)⁵⁰⁾

脱プロレタリア化の目的は精神生活の安定である。その具体的手段は共同決定, 利潤参加および田園都市政策である。⁵¹⁾共同決定と利潤参加は企業従業員の疎外感や従属感を解消しようとするものである。田園都市政策は都市住民をたとえば産業の分散化によって田園地帯へ移住せしめ, 土との触れ合いを回復することで精神面の安定を図ろうとする政策である。

C. 社会的バランスの実現

a. 国家財政による所得再分配政策⁵²⁾

b. 失業対策

完全雇用をめざした景気政策がその具体例である。⁵³⁾

c. 生活の安定化

インフレーション対策としての所得政策や通貨安定政策, 国民生活の安定化のための最低賃金・扶養手当・公共住宅・各種の社会保障などの施策が⁵⁴⁾考えられている。

48) Müller-Armack[19]S. 152, Müller-Armack[20]S. 276-277

49) Müller-Armack[20]S. 275, 279, 280, 281, 283

50) Müller-Armack[19]S. 153, Müller-Armack[20]S. 198

51) Müller-Armack[19]S. 153, Müller-Armack[20]S. 198, 228, 240, 306-307

52) Müller-Armack[20]S. 257

53) Müller-Armack[20]S. 240, 247, 279, Müller-Armack[21]p. 270

54) Müller-Armack[19]S. 152, Müller-Armack[20]S. 240, 278, 306-307

V オイケンとミュラーアルマック

ドイツの新自由主義には二つのグループがある。フライブルク学派(Freiburger Schule)と社会学的新自由主義⁵⁵⁾(Soziologischer Neoliberalismus)である。フライブルク学派はNSDAPが政権を取った1933年にフライブルク大学で結成された。オイケンと私法学者のベーム(F. Böhm)がこの派の代表である。本稿で取り上げたミュラーアルマックは社会学的新自由主義に属する。この派にはほかにレプケやリュストウ(A. Rüstow)がいる。

両グループは基本の主張(人格の自由・市場経済・私有の擁護, 反全体主義・反国家主義)の点では共通するが, 研究関心の面では異なる。フライブルク学派が経済秩序に関する経済学的研究にウエイトを置いたのに対し, 社会学的新自由主義は経済のほかにそれを取り巻く社会環境に関心を寄せ, 社会・国家・法・宗教・倫理などの研究にも力を注いだ。経済社会学的スタンスがこの派の特徴である。

ミュラーアルマックは自説を展開するにさいしてオイケンをかなり意識している。オイケンから出発したといってもよい。つまり, オイケン説を受け入れながらこれを超えるという態度をとっている。オイケン説と対比させると, ミュラーアルマック説の別の面が見えてくる。

オイケンは理想の経済秩序として競争秩序を提唱した。競争秩序は「人間と事物の本質に合致した秩序⁵⁶⁾」である。人間の本質である人格的自由と事物の本質である稀少性の克服を同時に実現しうる経済秩序である。ミュラーアルマックはオイケンの競争秩序を受け継いでいるが, 両者の間には違いもある。オイケンは自由と効率という角度から競争秩序を提唱したのに対し, ミュラーアルマックの場合には効率の視点が後景に退き, ほとんど自由のみの観点から競争

55) 社会学的新自由主義はレプケ自らが命名したものである。Röpke[27]S. 51. フライブルク学派と社会学的新自由主義の分類についてはCassel[2]S. 4, Starbatty[28]S. 67を参照した。なお, ヴルフ(M. Wulf)は前者を個人主義的新自由主義, 後者を宗教的新自由主義と名づけている。Gutmann[7]S. 55

56) Eucken[4]S. 372, 邦訳p. 504

秩序が擁護されている。

ミュラーアルマックは次のように述べている。「経済政策の形成手段としてもつばら競争秩序のみを強調する向きがあるが、わたしはかねてよりそうした考えはあまりにも狭すぎると感じ、これを超えて市場整合的な社会政策的施策システムを意識的に追究してきた⁵⁷⁾。オイケンを超えるという宣言である。この点に関して二点ほど指摘しておきたい。ひとつは両者の方法論についてであり、もうひとつは両者の秩序像についてである。

オイケンの方法論は、ハチスン(T. W. Hutchison)に従えば「スミスの方法⁵⁸⁾」である。経済問題にアプローチするさいに固有に経済的な事象を考察対象にし、非経済的ファクターを与件として外置する方法である。この限りでは「リカード的方法⁵⁹⁾」と同じである。ただし、オイケンは与件(欲求、自然、技術、社会的組織、伝統、慣習、法律など)を切り捨てたのではなく、経済に関連づけて与件をも考察するというスタンスをとっている。その代表例が「諸秩序相互依存」(Interdependenz der Ordnungen)である。市場経済は民主政治とのみ、中央管理経済は専制政治とのみ両立しようというワンセットの考えである。ミュラーアルマックの方法論はオイケンほど明確ではないが、経済と他の生活領域を一体的に捉えようとしていることは確かである。好意的に解釈すれば歴史学派の方法論に通じる総合的方法といえるであろう。総合的方法を採ったために広く社会学的ファクターを取りこめたのであるが、その反面で曖昧さや未完結性という代償を支払わざるをえなかったのである。

このような方法論の違いは両者の秩序像に反映されている。オイケンの競争秩序もミュラーアルマックの社会的市場経済もめざすべき秩序であるが、理想の程度でいえば競争秩序の方がより理想的である。オイケンが自由と効率という明確な価値をベースにして経済に限定した秩序像を設計したからである。これに対し社会的市場経済は政策実践を意識して自由のほか安全という間口の広

57) Müller-Armack [20] S. 10

58) Hutchison [12] p. 162

59) Hutchison [12] p. 163

い価値をベースにしたために、また社会学的要素を数多く取り込んだために全体として理想性が薄れる結果になっている。

ついでに言うておけば、バリー(N. P. Barry)はこのように理想を掲げるドイツ新自由主義を「最終状態の自由主義」(end-state liberalism)⁶⁰⁾と呼んだ。オイケンはより原理主義的で理想主義的であり、ミュラーアルマックはよりプラグマティックで政策志向的といえよう。

オイケンもミュラーアルマックも干渉主義からナチズムに至る激動の時代を生きた。兩人ともそうした体験の中から市場経済は野放しにすると暴走し、それを場当たりの統制すると全面統制経済に至らざるをえないという教訓を得た。市場経済を有効に制御するにはどうすればよいか。オイケンと同僚のペームは市場経済の法的囲い込み⁶¹⁾(rechtliche Einhegung)を主張した。これに対し、ミュラーアルマックは上述のように社会政策による市場経済の制御を提案したのである。

VI おわりに

社会的市場経済に対する今日のドイツ経済学界の評価は分かれている。一方には肯定的な評価がある。たとえばヴュンシェ(H. F. Wünsche)は、「社会的市場経済はドイツでは再生されようとし、東欧では模倣されようとし、他の地域では輸入されようとしている」⁶²⁾と述べ、社会的市場経済の健在ぶりをアピールしている。

他方にはネガティブな評価がある。社会的市場経済は閉塞状況に陥ったという評価である。このような見方をする論者は閉塞状況の打開を主張する。その方向は二つある。未来志向と原点復帰である。未来志向派は社会的市場経済の時代は終わったと考え、このコンセプトに代えてたとえば「エコロジーの市場経済」⁶³⁾(Ökologische Marktwirtschaft)や「環境・社会的市場経済」⁶⁴⁾(Öko-soziale

60) Barry[1]p. 111

61) Haselbach[9]S. 178

62) Wünsche[34]S. 133

63) Koslowski[15]S. 5, Müller-Armack[22]S. 2

64) Pies[25]S. 122

Marktwirtschaft)を提案している。原点復帰派は社会的市場経済の原点に立ち返って、その再生を図るべきだと主張する。たとえばゾルトヴェーデル(R. Soltwedel)は、「可能な限りの市場、必要な限りの規制」という本来の理念に立ち返って、私有化・規制緩和・補助金削減・行財政改革などを行い、社会的市場経済の復活を図るべきだ、と述べている⁶⁵⁾。

本稿は原点復帰派の戦略は有効かという問題意識から筆者なりに原点遡及を試みたものである。ミュラーアルマックの社会的市場経済は「社会的」にウェイトが置かれたコンセプトである。社会政策重視のコンセプトである。社会政策への傾斜は市場経済の機能を損なわなかつただろうか。市場経済を防衛するのは市場整合性の原則と補完性の原則であった。これらだけで十分であっただろうか。次の機会に考えてみたい。

社会的市場経済のデザイナーはミュラーアルマックだけではない。社会学的新自由主義派のレブケやリュストウ、フライブルク学派のオイケンやベーム、さらに両派の中間に位置するエアハルトも社会的市場経済の父と言われている。原点遡及というからにはかれらの説にも目を通す必要があるだろう。時間をかけて検討してみることにしよう。

引用文献および参考文献

- [1] Barry, N. P., Political and Economic Thought of German Neo-Liberals, in Peacock, A. (ed.), *German Neo-Liberals and Social Market Economy*, London, 1989, pp. 105-124.
- [2] Cassel, D., et al., Soziale Marktwirtschaft, in Cassel, D. (Hrsg.), *50 Jahre Soziale Marktwirtschaft*, Stuttgart, 1998, S. 3-31.
- [3] Clapham, R., Über die zukünftige Bedeutung der nationalen Wirtschaftsordnung, in Behrends, S. (Hrsg.), *Ordnungskonforme Wirtschaftspolitik in der Marktwirtschaft*, Berlin, 1997, S. 65-80.
- [4] Eucken, W., *Grundsätze der Wirtschaftspolitik*, 4. Auflage, Tübingen, 1968. 大野忠男訳『経済政策原理』, 勁草書房, 1967年.

- [5] 福田敏浩「新自由主義と社会的市場経済」,『彦根論叢』,第285・286号,1993年,pp.265-280.
- [6] Grosser, D., et al., *Soziale Marktwirtschaft*, Stuttgart, 1988.
- [7] Gutmann, G., Ideengeschichtliche Wurzeln der Konzeption der Sozialen Marktwirtschaft, in Cassel, D. (Hrsg.), *50 Jahre Soziale Marktwirtschaft*, Stuttgart, 1998, S. 49-65.
- [8] 鉢野正樹「現代ドイツ経済思想の源流」,文眞堂,1989年,特に第6章.
- [9] Haselbach, D., *Autoritärer Liberalismus und Soziale Marktwirtschaft*, Baden-Baden, 1991.
- [10] Hayek, F. A. v., et al., Wilhelm Röpke-Einleitende Bemerkungen zur Neuausgabe seiner Werke, in Röpke, W., *Die Lehre von der Wirtschaft*, 12. Auflage, Bern, 1979, S. V-XXXVI.
- [11] Hentschel, V., *Ludwig Erhard, die soziale Marktwirtschaft und das Wirtschaftswunder*, Bonn, 1998.
- [12] Hutchison, T. W., *The Politics and Philosophy of Economics*, Oxford, 1981.
- [13] 石田一之「社会的市場経済の理論的再検討」,経済社会学会編『リコンシダー・コミュニティ』,現代書館,1998,pp.109-116.
- [14] Kloten, N., *Der Staat in der Sozialen Marktwirtschaft*, Tübingen, 1986.
- [15] Koslowski, P., *Gesellschaftliche Koordination*, Tübingen, 1991.
- [16] Lenel, H. O., Haben Wir noch eine Soziale Marktwirtschaft?, in *ORDO*, Bd. 22, 1971, S. 29-47.
- [17] 丸谷冷史「ドイツ新自由主義の経済政策思想」,『国民経済雑誌』,第169巻第5号,1994年,pp.1-21.
- [18] Möller, H., Zur Theorie und Politik der Wirtschaftsordnung, in Schneider, J. (Hrsg.), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik in der Bundesrepublik Deutschland (1933-1993)*, Stuttgart, 1996, S. 361-382.
- [19] Müller-Armack, Alfred, Die Wirtschaftsordnungen sozial gesehen, in *ORDO*, Bd. 1, 1948, S. 125-154.
- [20] Müller-Armack, Alfred, *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik*, Freiburg, 1966.
- [21] Müller-Armack, Alfred, The Principles of the Social Market Economy, in Koslowski, P. (ed.), *The Social Market Economy*, Berlin, 1998, pp. 255-274.
- [22] Müller-Armack, Andreas, Das Konzept der Sozialen Marktwirtschaft, in Grosser, D. (Hrsg.), *Soziale Marktwirtschaft*, Stuttgart, 1988, S. 1-34.
- [23] 長屋泰昭「社会的市場経済とドイツ経済」,『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』,第

46卷, 1998年, pp. 7-21.

- [24] 野尻武敏「社会的市場経済:その理念と実際」,『大阪学院大学経済論集』,第9巻第3号, 1995年, pp. 109-155.
- [25] Pies, I., Theoretische Grundlagen einer Konzeption der sozialen Marktwirtschaft, in Cassel, D. (Hrsg.), *50 Jahre Soziale Marktwirtschaft*, Stuttgart, 1998, S. 97-132.
- [26] Röpke, W., *Die Gesellschaftskrisis der Gegenwart*, 6. Auflage, Bern, 1979.
- [27] Röpke, W., *Civitas humana*, 4. Auflage, 1979.
- [28] Starbatty, J., Soziale Marktwirtschaft als Forschungsgegenstand, in Ludwig-Erhard-Stiftung (Hrsg.), *Soziale Marktwirtschaft als historische Weichenstellung*, Düsseldorf, 1996, S. 63-98.
- [29] Soltwedel, H., *Wettbewerb, Verantwortung und Solidarität*, Güterloh, 1997.
- [30] Soltwedel, H., *Dynamische Märkte-Solide soziale Sicherung*, Güterloh, 1997.
- [31] Stern, K. (Hrsg.), *Staatsvertrag zur Währungs-Wirtschafts-und Sozialunion*, München, 1990.
- [32] Vanberg, V., Ordnungstheorie as Constitutional Economics, in *ORDO*, Bd. 39, 1988, pp. 17-31.
- [33] Watrin, Ch., The Principles of the Social Market Economy, in *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Vol. 135, 1979, pp. 405-425.
- [34] Wünsche, H. F., Erhards Soziale Marktwirtschaft, in Ludwig-Erhard-Stiftung (Hrsg.), *Soziale Marktwirtschaft als historische Weichenstellung*, Düsseldorf, 1996, S. 131-169.